

Ⅲ. 本校教諭による台湾視察

このプログラムは、台湾師範大学と金沢大学の交流プログラムであるので、次は金沢大学生が台湾に出向き、授業を行う番である。金沢大学からも5人の学生が2月27日～3月9日の2週間で、授業見学・授業準備・授業展開を行った。

ここでは、本校とのつながりないはずであったが、幸いなことに、金沢大学の教授方とともにこのプログラムの最後2日間に参加し、現地の先生方の授業を参観する機会を得た。日程は次のようであった。

- 3月8日 午前 仁愛国民中学 訪問
- 午後 台湾師範大学附属高等学校 訪問
- 3月9日 午前 反省会
- お昼より終了セレモニー

3月8日の中学校・高等学校の訪問では、どちらの学校も南国造りになっており、廊下が外に面していることにより違和感を覚えながら、台湾の授業を拝見した。このように外国での英語の授業を参観するのは初めてのことであり、また特にレベルの高い学校の授業を参観して、大変勉強になった。

1. 仁愛国民中学

中学2年生の授業を2コマ参観した。教科書は、日本と同じで、レッスンごとに学べき文法項目を含んだダイアログが書かれており、その文法項目を用いた練習がその後に続いていた。カラー版で、何人かの登場人物の日常を描かれているところは日本ととてもよく似ていたが、パッとみた印象は、日本の中学校の教科書よりもずっとダイアログが長かった。1コマ目は、ちょうど1レッスンが終わったところだったため、最後のまとめの応用練習であった。2コマ目は、通常授業を参観した。

・ 1コマ目

ちょうど最大級に関するレッスンが終わったところだったので、先生の手製のプリントで授業が行われた(資料③)。プリントには、たくさんの『一番』があり、それらをインターネットを用いて、正解を探し出し、プリントに書き込む、という形であった。まず、5人前後のグループを作り、それぞれのグループに一台のノートパソコンが用意された。(先生は、授業にノートパソコン専用の小型のスーツケースを持参する。基本1クラスに8台+1台(先生のマザーパソコン)が用意されている。)そして子どもたちは、一斉に検索エンジン等を用いて、情報を集めていった。

授業の指示は全て英語でされていたが、グループワークになった途端、メンバー同士で話す言語は全て中国語であった。また、検索においても、英語で探しているグループもあったが、中国語で探している生徒たちも目立った。気になったので、先生に聞いてみると、先生の方から生徒たちに、『最終的には、プリントに英語で書くのだから英語でした方がいいよ』とのアドバイスが英語で入った。グループワークになるとどこでも苦勞するところは一緒だなと感じたのは、グループ間の作業速度の差に関してであった。先生も悩まれているそうである。ただ、マザーパソコンは、全てのパソコンが何をしているかを確認できる作りになっているため、先生から適宜それぞれのグループに指示が入っていた。

この授業で印象に残ったのはやはりネット環境のすばらしさである。教室で使えるノートパソコンのみならず、どうやらiPadも用意されているらしい。このような機器

は、使いようによってはとても授業で活躍してくれるし、その可能性の片鱗を見たような気がした。

・ 2 コマ目

教科書を用いて、次のレッスンに進んでいた。授業の流れとしては、

①デジタル教材を用いて、一度ダイアログを動画で確認。

②単語の確認

意味の確認（同義語を生徒から引き出す）

発音の確認（先生のあとにリピート）

③先生が口頭で、ダイアログに関する質問を3～4個与える。

④デジタル教材を用いて、もう一度ダイアログを確認。

③の答えを生徒から引き出す。

⑤教科書音読（先生のあとにリピート）

という流れであり、日本の中学校でも同じような形がとられているのではないかと思った。違いといえば、全ての指示が英語でなされており、意味の確認等においても、基本的には、英語で確認が行われた。そして、一番の違いはやはり視聴覚教材の充実ではないかと思う。全てのクラスには、デジタル教材が使える環境が整えられており、生徒たちは、アニメを見るような形で、教科書を学ぶことができていた。また、教科書自体をスクリーンに映すことができるので、生徒たちの顔はよく上がっており、先生も黒板に書く文字は最小限で済んでいた。



以上2コマの授業を参観して感じたことは、何よりも中学生の語彙力の高さであり、授業中の発言の多さであった。確かに、生徒たちが勝手に話出してしまうところはあったが、それらは先生の英語の指示を的確に捉えているからできることであり、生徒たちの発話に対する積極性がよく出ていた。また、単語力に関しては、ダイアログの中に“kind”という単語が出てきた。これは日本の中学生にもおなじみであり、聞けば「優しい」という意味だとすぐに返ってくるであろうが、この仁愛中学では、先生が

“What’s the meaning of “kind”? (“kind”の意味はなんですか?)”と尋ねると, ”generous”と生徒は返す。いったいどれだけの日本の中学生が “generous”を知っているだろうか? また, いったいどれだけの高校生が “kind”の類義語として “generous”を持ち出すことができるだろうか, と少し考えこんでしまった。

2. 台湾師範大学附属高等学校

台湾師範大学附属高等学校は, 台湾の高等学校の中で National Taichung First Senior High School (第一高級中学) につぐ高等学校である。トップ層の生徒たちが集まるが, 校風には「自主自立・自由」を掲げており, 生徒たちは在学中に様々なことに挑戦し, 卒業後も様々な分野で活躍している。

そのような高等学校で, 3年生の理系医学進学コースの2時間続きの授業(ただし, 途中長めの休憩が入る)を参観した。

・教材

市販の教材であり, 全て All English で書かれている。レッスン毎に分かれており, 各レッスン4~5ページの英文が載っており, その後3ページほどを用いて内容に関する質問 (True or False / Multiple Choice etc), 単語の定義とその単語を用いた例文が約5ページ強に渡って載せてある。

・生徒層

先にも述べたが, 少し特殊なクラスであった。3年生の理系医学進学, つまり台湾師範大学附属高等学校の中でも, 優秀な生徒が35名強集まるクラスである。

・1コマ目

まず目を引いたのは, 教室の真ん中にいる生徒であった。彼は黒い帽子をかぶり, 黒いマントを羽織っており, そして肩についた糸が天井まで伸びている…。よく見ると, 黒いマントはゴミ袋を破いたものであり, 生徒が人体模型を使って作り出したダミー君であった! 周りの子が糸を引くことでダミー君は手を挙げることができ, この授業も次の授業でも大活躍する。どうやら, その週末が記念祭だったらしく, 学校の至るところで, 様々な催しの準備が進められていた。

ダミー君は置いておいて, この1コマ目は一言で言うと『単語ゲーム』で終わることになる。順番としては次のような形であった。

①先生が教室を右と左で2つに割り, それぞれで競う形をとらせる。先生は生徒の番号が書かれたくじを引き, 当たった生徒は次のことを行う。

1) 当該レッスンに出てきた単語を一つ述べる。

2) 綴りを述べる。

この時点で, その生徒がいるグループは1ポイントをゲットできる。

3) 先生からその単語を使って文章を作ることに挑戦するかどうか尋ねられる。ここで, 例文を作り出すことができるとそのグループはさらに1ポイント得ることができる。

このゲームは生徒全員に当たり次第終了となる。

②次に先生が用意してあった当該レッスンに出てきた単語が書かれたカードを用いて行われる。各グループから一人前に出てきて, カードを受け取る。次にそのカードを受け取った生徒は, 一枚ずつめぐりながら, 自分のグループの生徒たちに, 英語で定義や意味等を与えることで, その単語が何であるかを当てさせる。

このゲームは制限時間を設けることで、競わせる。

以上2つのゲームで1コマ目終了となった。ちなみにゲームの最中は、(一応)教科書を見てはいけないことになっていた。

この授業を参観して感じたことは、何と云っても生徒たちの語彙力の豊富さである。また自発精神もすばらしく、特に、生徒たちが作った例文の質の高さに圧倒された。

・ 2コマ目

この時間は、1コマ目で確認した単語のテストから始まる。単語テスト自体は、私たちが日本で用いている基本的なものと変わらないものであった。

その後、教科書を開いて、先生がところどころで「これはこういう意味だね。」ということをはさみながら、教科書を読んでいった。

3. 台湾視察を終えて

どちらの学校も、すばらしい先生方と生徒たちだという感覚を受け、そのような学校を視察できたことに大変感謝している。この視察で気付いた点は以下の3点である。

第1点は、『生徒のモチベーション』に関してである。台湾師範大学の教授方が本校の授業を参観して一番驚いていたし、変えるべきだと言われていたことは、生徒たちが、授業中の発話に消極的であることであった。もちろん、国民性の違いもあるし、何より台湾師範大学生が授業を行った時は、生徒側も先生側(学生側)も初対面であったため余計に生徒たちはシャイになっていたと言わざるをえない。しかし、日本の教育は生徒が受け身であることは否めないし、それは英語においても言えることであると思う。先生がいくら英語を使ったところで、生徒からの自発的な英語使用が無ければ、生徒たちの英語運用能力は上がっていかない。

それでは、どうやって生徒の積極性を高めることができるのか。確かに、台湾の生徒たちの授業での発言度はとても高かった。しかし、どちらかという勝手に話をはじめたりすることも多く、どちらかという英会話学校のような雰囲気が特に中学校では感じられた。これはおそらく先にも述べたように、多くの子供たちが英会話専門の塾に幼いころから通っているせいもあると考えられる。そのため、台湾で参観した授業をそのまま日本で実施したからといって、生徒たちに同じような発信を期待するわけにはいかない。しかし、ゲームのような要素で、生徒がもっと発信しやすい環境を整備することを考える必要があると感じた。

第2点は、授業の考察の際にも触れたが、台湾の生徒たちの単語量の多さである。私は、英語を学ぶ上での基礎は何よりも単語と文法であると思っている。私たちが日本語をツールとして用いることができるのも、豊富な単語量とそれを支える文法があるからである。それではどうして台湾の生徒たちは日本の生徒たちに比べて多くの単語を知っているように感じられたのか。もちろん、英会話塾の存在もあるだろう。しかし、学校での授業についていえば、台湾師範大生たちが本校での指導の際にも言っていたように、英和辞書だけに頼らない単語調べというのも大事なのではないかと感じた。類義語や同義語を用いることで、感覚的に単語に触れさせ、またボディーランゲージや絵を用いて視覚的にも考えさせる。この点で言えば、やはり英和辞典での単語調べというものの意味がかなり薄いものになるのではないかと思う。私自身、生徒には英英辞書での意味調べをすすめているが、単語を派生させて覚える必要性を強く感じた。

第3点は、教員の英語力の高さである。今回の研修では上記で述べた先生方以外の先生方にもお会いすることができたのだが、みながとてもすばらしく流暢な英語を話されていた。そしてもっと学ぼうという姿勢を持たれていることに感銘を受けた。やはり教える側も日々勉強をし、より質の高いものを提供する必要があることを痛烈に感じ、そのことが何よりの収穫であったように思う。